

「長谷川邦昭ケネス」「七十歳」「アメリカ、カリフォルニア」「本島」

### 私と教祖

人間は「陽気ぐらし」をするために、この世に生まれて来ました。しかし我々お道に専念する程、大きなふしに遭遇をいたします。それは、親神様が私達に心の成人を急いで陽気ぐらしにお導き下されるのでしょ。心の成人とは、どの様なふしも喜び、強く、耐えられ、大きな人間にさせて頂く絶交のチャンスですが、分かっているにも実際に我が事になるとついついと心を曇らせます。今から四十年前の事ですが。私はアメリカ空軍青森の三沢基地に駐屯していた時に後程結婚する妻に出会いました。妻は他宗教をしまして自分にも何度か他宗教に進められ会合に行った事もありました。しかし私が除隊する前、思い切って、“私の家は天理教だからと言うと”、妻はびっくりしました。そして、もう一度思い切って修養科を進めると、その時も素直に行ってくれました。それには私がびっくりしました。

アメリカに帰り、サンフランシスコでエンジニア大学在学中に私は多量の咯血をして天理教の先生からは道一筋なる事進められ、妻の心定めで私は一命取り止め助かりました。おぢばに帰り私が修養科に入っている最中に妻は実家岩手に帰りまして母に天理教の布教をする事を報告すると、母は反対しなかったらしいが“天理教しても家はあるのかい？、食べものはあるのかい？”と聞かれて、“そんなもの布教に出るから無いよ”、と妻が言うと、母は、“そんな事をしなくてもとよいのにと”ほろほろと涙を流したそうです。きっと、妻の母は自分の娘を遠いアメリカの地に放すだけでも心を痛めたのに天理教を信仰するならともかく、知らない地で布教など思いもよらなかったでしょう。お道一筋を夫婦で選んで教会に入り込んだのは私29才、家内は26才でした。二人共お道は始めてでありました。八つの埃、十柱の神様、手踊りさえもまともに知らず教会に入り込みましたから。最初の頃は、無口で話し下手な私は歯がいさから夜も眠れなく心はあせって、何も手につかない日々が続きました。

妻はアメリカで教会生活、文化の違い、英語も話せない中、小言、不足を一つと言わないでいつも笑顔でいました。それが私にとって一番の救いでありました。思い返しますと、教祖百年祭以前、義弟がレストランの失敗という事情により自殺しました。私が保証人になっていたので莫大な借金の責任を取るはめになりました。子供もまだ小さく、世間の信用も失い、教会の信者達も離散して家族だけの月次祭がしばらく続きました。

そのふしの中、百年祭に向かって論達第三号のご発布を頂きました。

「百という字の意は、白紙に戻り一より始めると謂う。」

そして、百年祭の一年前、おぢばの神殿で教会長講習会の時、前真柱様の二時間余りのお話がありました。「ここにいる皆様方の中にいづんでいる人がいるとするならば、そ

の心をちょっとおやさまの方向にむけてほしい。ちばが息を吐けば皆様の教会も息を吐き、ちばが息を吸えば皆様の教会も息を吸ってほしい、云々このお言葉が強烈に私の胸に響きました。私は人間思案を断ち切って次の事がらを心定めして、実行する事にお誓いいたしました。

「禁酒、禁煙」「十二下りを毎日勤める」「月々のお供えをふやす」「日々の理を毎日送る」「おちばに春秋の大祭と誕生祭には毎年帰る」

以上、五つの心定めを大変な借金の中ですが実行をさせていただきました。

しかし、その心定めの中にも又、ふしをお見せ頂きました。その一つに刑務所から出所した青年を教会で預かっていたのですが、その青年が麻薬(コカイン)をしているとも知らずにいた私はある日突然、野球のバットで頭と両手を思い切り叩かれたのです。あたりは血の海になり、命からがらに私は必死に教会に逃げ込みました。家内と子供が出て来て、すぐ救急車を呼び病院に運ばれました。医者は私の状態を見て「良く生きてたね、車椅子になっても不思議ではないよ。君の左腕の骨はめちゃめちゃで、出来る事はするが、もしかすると使えないかもしれないから保証はしませんよ」と言われました。医療保険もなく、レストランの借金の六万ドルの上に治療費五万ドルの追加の借金が出来ました。両手はギブスをはめて、食事、トイレなど全部妻は愚痴一つこぼさずギブスが取れるまで世話取りをしてくれました。ギブスを取れるまではおつとめが出来ず、そして、一年位は頭がふらっとするし、本当にやる気を失いました。次々とお見せ頂くふしに、精神的、肉体的にも最悪の状態になり、自分は神様から見捨てられ、こんな状態では御用が果たせないのではと日々悶々と悩んでいました。心定めを真剣に勤めるほどに厳しいふしを次々お見せ頂きました。

そのような悩んでいる頃、真夜中に教祖殿の回廊で拝をしていると、教服姿の方が私の前に座られたので頭を上げると、前真柱様でした。そして、「長谷川君、何もかも分っているよ」と優しく手を握って下さり、私のやるせない胸の内を安らかにして頂き、私は前真柱様に抱きついて泣きました。ハッと気が付くとそれは夢だったのです。それはおやさまが夢を通して私を勇めて下さったと思います。そして朝勤めにおふでさきを拝読していると、次のおうたが目にとまりました。

けふの日ハなにがみへるやないけれど

八月をみよみなみへるでな

五-56

みへるのもなにの事やらしれまいな

高い山からをふくはんのみち

五-57

私はこのおふでさきに感動して涙があふれてきました。前真柱様の夢を見た日が八月一日でした。おふでさきのお言葉はおやさまが お働きになったとしか思えませんでした。それから一変したように不思議な事が起こってきました。その一年後、前真柱様がアメリカ伝道庁にお立ち寄りになられ、庁長様のご配慮で前真柱様にお目にかかりました。私はあまりの感動で今までの事情を聞いて頂き御礼を申し上げました。すると、前真柱様は私の手を握って下さり、「長谷川君なあ、教祖はなあ一、二十年、三十年すると成る程という日が来るといわれたで、頑張つてな」とお言葉を下さいました。私は涙を流しながら頭を上げると、前真柱様の目からもキラッと光るものが流れていました。まさに夢が実現したのです。

どのよふなゆめをみるのもみな月日

まことみるのもみな月日やで

十二-163

教祖百十年祭には、私は「一年間、毎月おぢばへ帰らせて頂く」ことを心定めをしました。莫大な借金の中の心定めですからとても難しい心定めでした。何とか最後の十二月の月まで一年のおぢば帰りの心定めを勤めさせて頂きました。そして、十二月二十七日の教祖殿のおつとめ後おやさまの御前にぬかづき一年間毎月お連れ帰り頂戴した感謝の心一杯のお礼を申し上げて、おやさまに、「今後どの様にさせていただきますか、」と伺っていましたら、その時誰かが私の肩を叩かれたので、誰だろうと振り返ると、前真柱様奥様の中山まさ様でした。奥様は私に、にっこり微笑みをうかべて、「お帰りなさい、毎月毎月おぢばに帰って下さりご苦労様でした。ありがとう」と仰って下さいました。それは、それは、おやさまが優しく声をかけていただいたように聞こえました。それまで一度もまさ奥様とお話しをした事はありませんし、私が毎月帰っている事を誰にも知らせていないのに何故お知りなのだろうと不思議でした。私はあまりの嬉しさに涙が頬をつたい、頭の中は真っ白になり感激のままに「おぢば帰りを続けさせて頂きます」とまさ奥様に申し上げていました。後になって、不思議に思いましたが、よくも常識では不可能な事が言えたなど、きっとおやさまがお働きになったのでしょう。まさ奥様のあのお言葉のおかげで、あの感動、感激で、百二十年祭、立教一七〇年まで百四十四ヶ月、毎月おぢばにおやさまにお導き頂き帰らせて頂きました。

いまなるのなやみているわつらけれど、

これからさきハ心だのしみ

十一-65

本当に、今日成人の鈍い私があるのは、おやさまが手を引いて今日まで導いて頂いたお陰です。その様な中、妻は一言愚痴も言わず私を陰から支えて頂き心から感謝をしています。一時他宗教を私に進めた妻が今は天理教の会長をしています。四十年前妻の母親は未知のアメリカに、そして、天理教も判らない愛娘を思う上の不安に涙をこぼしましたが今はきっと安心をして天から見守って下さっていると思います。

ご存命のおやさま、成人の鈍い私達二人を今日までお連れ頂きありがとうございました。これからも、おやさまのひながたを思い陽気ぐらし世界建設に向かって御存命のおやさまと共に歩ませて頂くよふぼくを誓います。

月日にわにんけんはじめかけたのわ  
よふきゆさんがみたいゆへから

十四-25